

## 猿の手

その夜店（よみせ）は、何人かの客で賑（にぎ）わっていた。木製の台の上には、茶色いバッグが置いてある。ちょうど一人の中年の女性が、そのバッグを持ち上げたところだった。

「いいですか、今の重さをよく覚えていてくださいよ。では今度は手首にこのリチウムバンドを巻きますよ。いいですか。はい、その状態でもう一度持ち上げてみてください。」

香具師（やし）がその声をかけた。落ち窪（くぼ）んだ目に短いあごひげをたくわえている。

「あら、軽いわ。本当に軽くなったわ。」

「これがリチウム効果です。筋肉を使う時に、わずかな電磁波を出していることはみなさん知ってますよね。疲れがたまると、その電磁波の流れが悪くなるわけです。その流れをこのリチウムから微量（びりょう）に放出されるイオンがスムーズにしてくれるんです。こちらの肩パップを貼れば、肩こりにも効きますよ。アメリカのNASAの技術チームが、開発した新技術です。よそで買えば2倍はしますよ。」

香具師はそう言って、ビニールに入ったりリストバンドと、肩パップを取り出した。リストバンドには三千元、肩パップには二千元の表示がしてある。

「じゃ、私そのリストバンドを一つ。肩パップを一つもらうわ。」

さきほどの女性が、財布を取り出しながらそう言った。他にも何人かの客が、あわてて財布を取り出していた。残り僅（わず）かだったリチウム製品は、あっという間に売り切れてしまった。

ほんの何分かで、何万という金が、この香具師の懐（ふところ）に転がり込んだ勘定（かんじょう）になる。この神社で続く3日間の夏祭りを通して考えれば、大した稼（かせ）ぎになる。

「おじさん、頭のいい商売してるね。」

真二郎は、客がいなくなった頃合（ころあい）を見計らって、そっと声をかけた。

「どつという意味だい。坊や？」

男は帰り支度の手を休めずに言った。そう言いながらも目は油断なくちらちらと真二郎の方を見ている。

「まあ、足元のスイッチに気付く人間は滅多にいないだろうけどね。」

男の手は、一瞬ピクリと止まったが、また休みなく動き出した。

「なるほど、お見通しってわけか。坊やはマジックが好きなのかい？」

「うん、まあね。」

真二郎は、ちよっと得意になってそう言った。真二郎は、まだ中学生だが、デパートのマジック売り場に売ってあるような普通のマジックから、通信販売でしか手に入らないような専

門の解説書まで、マジックのことならあらゆるものに目を通していた。その真二郎から見れば、この男の手口は、子供だましのようなものだった。恐らく台の下には強力な電磁石が仕込んであって、バッグの底には鉄のおもりがつけてあるのだろう。客が、リストバンドを巻かずにバッグを持ち上げる時にはその電磁石をオンにしておく。そうしてその後、客がリストバンドを巻いて持ち上げる時には、こっそりスイッチをオフにすれば同じバッグが軽く感じられるというわけだ。

「それで坊やは何が望みなんだい？」

「いや、別に……。ただ僕が学校でこの事を言い触（ふ）らせば明日の夜の売上は減るだろうと思つてね。」

男の顔に怒気（どき）が宿った。

「ごごう、あんまり調子に乗りやがると……。」

男は、大声でそう言いかけて、ふと周囲を見まわした。近くを通る大人が、ちらちらとこちらを不審そうに見ている。

「まあ、いいだろう。」

男はそう言つて、ひょいっと、どこからともなく枯れた枝のようなものを取り出した。それは真二郎の目から見ても、まったく何も無いところから取り出したように見える、見事な早業（はやわざ）だった。

「坊やなら聞いた事ぐらいあるだろう。ほらっ、猿の手だ。」

男は、薄笑いを浮かべながらその「猿の手」をひらひらさせた。ボルネオの奥地に伝わるといふ猿の手……。もちろん真二郎は、その話を聞いた事はあつたが、実物を見るのは、初めてだった。それは十年に一度しか見つかからない曼陀羅緋猿（まんだらひざる）のオスの右手を、日に干して作ると言われていた。その猿の手を、額に当てて念じれば本当に会いたい人に必ず会えるという幻の手だった。

「ごうだい、これを明後日まで貸そうじゃないか。坊やにだって二人きりで会いたい人間ぐらいはいるんじゃないのかい？」

男はささやくように続けた。真二郎の脳裏（のうり）に、すぐに村木冴子（さえこ）の輝くように美しい笑顔が浮かんだ。あの村木冴子と二人っきりの時間を過ごせるなんて夢のようなことに思えた。

「よし、話は決まった。これを坊やに貸すことにしよう。ただし明後日の夜十時までだ。その時間にここに来てくれ。それまではこの事は二人の秘密だよ。」

二日後の夜、真二郎は神社の境内（けいだい）の奥にある社（やしろ）にいた。さきほどから何度も時計を覗（のぞ）きこんでは、待ち遠しい気持ちで落ちつけようとしていた。月の

明かりに照らされた神社は、昨日までの夏祭りが嘘のように人っ子一人いない。真二郎はもう一度時計を見た。八時まであとちょっとだ。

その時、境内に続く参道（さんどう）の方から足音がして誰かが、立ち止まった。村木冴子だ。小首をかしげるようにしてこちらの方を見ている。

「やあ、村木さんじゃないかい。」

「やっぱり小野君……。こんなところで何してるの？」

「いや、ちょっと気分転換に散歩していたんだ。」

「へえ、偶然ねえ、私もちょうど散歩してたところなの。」

冴子が、弾（はず）むような声で言った。偶然の出会い、人の心を浮き立たせる効果があるらしい。

「コーラがあるけど飲む？」

「あら、ありがとう。ちょうど何か飲みたいなって思ってたところなの。」

冴子は屈託（くつたく）なくそう言って、真二郎の隣に腰を下ろした。それから二人は色々な事を、とりとめもなくしゃべりあった。時々山際（やまぎわ）から吹いてくる風も心地よい。二時間が、あつという間に過ぎていた。

「あら、大変。もうこんな時間だわ。私も帰らなきゃ。」

冴子があわてて立ち上がった。

「じゃあね、小野君。今日は、すごく楽しかったわ。」

冴子は、にっこり笑って手を振った。この瞬間は生涯（しょうがい）忘れられないだろう。

「どうだい、坊や。願いは叶（かな）ったかい？」

ささやくような声に、真二郎はふつと我（われ）に返った。いつのまにか、あの香具師が、近くに立っている。

「さあ、約束だ。猿の手を返してもらおう。」

「……おじさん、お願いがあるんだ。猿の手、あと一週間だけ貸してくれないかい。」

「そんなの駄目だ。今日までって約束だったろう？　グズグズするなよ。俺はもう出発しなきゃいけないんだ。」

香具師は脇（わき）に止めてある小型のトラックをあごで示した。

「頼むからおじさん。もう一週間だけだから。今度こそ約束は守るから。」

真二郎は、祈るような気持ちでそう言った。その時、ふと香具師の胸ポケットから紙切れのようなものが覗（のぞ）いているのが目に止まった。高速の前売りチケットだ。端っこの方に「鯖（さば）」の字が見える。珍しい地名だから間違いない。鯖（さば）おか（インター）のことだ。鯖（さば）インターの近くで大きな神社という……。真二郎の頭はめまぐるしく動い

た。

「おじさん、今度は富田（とみた）神社だね。」

「何で、そんなの知ってる？」

男はぎくりとしたようだった。

「あそこの夏祭りも、人出が多いそうだから、ずいぶん儲（もつ）かるだろうね……もちろん何の邪魔も入らなければの話だけだね。」

次の瞬間、真二郎の腕はすごい力でねじ上げられていた。男が、あつという間に真二郎の腕を取っていたのだ。男の眼に、蛇のような冷酷さが宿っている。真二郎のひざが恐怖にふるえた。

「小僧（こぞつ）、何を考えてる？ 俺の商売を邪魔しようって気か？ 冗談でもそんなこと考えてみる。ただじゃすまさねえぞ。」

男はそう言って、もう一度真二郎を睨みつけた。男の口から、柿が腐ったようないやなおいがした。

「おじさん、お願いだから。あと一週間だけだから。必ず約束は守るから。本当のことを言っと、今日は、猿の手持ってきてないんだ。家に置いてきたんだ。」

真二郎は、震えながらも、それだけを繰り返した。

「小僧、ふざけやがって。大人をからかうと承知しないぞ！」

男が、さらに強力に真二郎の手をねじり上げた。ものすごい激痛が真二郎を襲った。

「お願いだよう、おじさん。お願いだから、おじさん。」

真二郎は、ほとんど泣き声で、哀願した。やがて男は、真二郎の言うことごとく、どうやらウンはなさそうだと分かるど、舌打ちしながら手を離れた。

「ようし、分かった。一週間だけだぞ。一週間後にここでまた会おう。その時には絶対に返すんだぞ。いいか、覚えておけよ。これ以上約束を破ると大変な事になるんだぞ。」

「ありがとつ、おじさん。約束は必ず守るよ。」

真二郎は、ほっとしてそう言った。もう一度村木冴子に会える。その時はそのことだけで真二郎の心は一杯だった。

次の日曜日、真二郎はターミナル広場の時計台の前のベンチに座っていた。

もうすぐ10時。もし、「猿の手」にお願いした願いごとが、もう一度実現すれば、まもなく村木冴子が現れるはずだった。

あと3分。あと2分。そしてあと1分……。真二郎は、目をつぶった。やがて真二郎の肩をとんとんとたく心配がした。真二郎が目を開けると、そこに村木冴子がいた！ 驚いたような顔で真二郎を見つめている。

「やっぱり小野君！。最近よく会うわねえ。誰かと待ち合わせなの？」

「いや、今日は、部活もないし。家にいるのも退屈だしなあと思って、この辺をぶらぶらしてたんだ。」

「へえー。偶然ね。私もそつなのよ。」

村木冴子は、こぼれるような笑顔でそう言つと、真二郎の横に腰をおろした。二人はしばらくは無言だった。

ターミナルに隣接した港の方から、ぼーという汽笛の音が聞こえた。ここはそれほど大きい港ではないが、それでもフェリーや観光船が、一日に何便か出入りしていた。

「ねえ、村木さん。もしひまなら、これから鷹島（たかしま）に行ってみようか？」

真二郎は、思い切つてそつ切り出した。ここ数日、考えに考え抜いたプランだった。

「えっ、鷹島？ いいけど……。小野君は大丈夫なの？」

冴子の返事に真二郎の胸は高鳴つた。これから一日中、あこがれの村木冴子と一緒にいれる！ それだけで真二郎は嬉しくて、声をあげて叫びたいような気持ちだった。

鷹島（たかしま）は岸壁から出るフェリーで30分ほどの距離にあつた。ほとんど人も住んでいない小さな島だが、春には、日本では絶滅危惧（きぐ）種とされている「熊鷹（くまたか）」が飛来することで、その名前がついていた。

フェリーが島に着くと、二人は歩いて島を一周した。遠浅の砂浜になつている東の浜では二人ともはだしになって歩いた。遠くの島まで一望できる北の展望台では、ホットドッグを買つて食べた。マスタードをつけ過ぎて顔をしかめる真二郎を、冴子は腹を抱えて笑つた。かもめが群れ飛ぶ西の岩場ではどつちが遠くまで小石を投げられるか競争した。どの場所も心が浮き立つように楽しかつた。

あつという間に帰る時間が来ていた。

帰りのフェリーで、真二郎は、フェリーが描く白い波しぶきを眺めながら、夢のように楽しかつた一日を思い出していた。だがその楽しかつた時間も、あとわずかで終わる……。だが、その前に真二郎には冴子に言わなければいけないことばがあつた。

「もしよければ……。もしよければ、時々こうして会わないかい？」

たつたそれだけのことばだった。今日、何度も冴子に言おうとして言えなかつたことばだった。この猿の手は、もう今日までしか使えない。この猿の手をあの男に返す今日までに、そのことばを、冴子に言わなければいけないんだ。真二郎はポケットから取り出した猿の手をじつと見ながら、さつきからそれを自分の心に言い聞かせていた。

「小野君。それ、何なの？」

冴子の声に真二郎は、はっと後ろを振り向いた。冴子が目を丸くして後ろに立っていた。真二郎はあわてて猿の手を、冴子の目から隠そうとした。だがその瞬間に、何かのはずみで猿の手は、真二郎の手をすべり落ちた。あつという間もなく、猿の手はひらひらと風に舞い、波間に落ちてしまった。そしてフェリーの白い航跡と共に、どどんフェリーから遠ざかっていった。

しまった！ 真二郎の頭の中が、真っ白になった。今から海に飛び込んででも猿の手を取り戻さなければ！ いや、船長さんに言っつて、フェリーを止めてもらう方が先だろうか？ 真二郎がもたもたしている間に、猿の手は、もう見えないくらい遠くに行ってしまった。

もう遅い！

あの男！ あの男に、何と言えいいんだ？ なくしてしまったなどと言えば、今度こそ何をされるか分からない！ 男の、蛇のような冷酷な目が浮かんだ。真二郎の心が恐怖で凍りついた。

「ねえ、さっきの「猿の手」じゃない？」

その時だった。村木冴子が、おずおずと口を開いた。思いがけないことばに真二郎は耳を疑った。

「そうだけど・・・。何で村木さんが、猿の手なんて知ってるんだい？」

「私の方こそ、聞きたいわ。」

冴子は笑っているような泣いているような複雑な表情を浮かべた。そして何かを思いきるかのように、ポーチから、何か枯れ枝のようなものを取り出した。

猿の手だ。それは、まぎれもなく猿の手だった。今度は真二郎が、驚く番だった。思わぬことこの成り行きだった。

「この猿の手ね。3年前に死んだおばあちゃんからもらったの。」

冴子が照れたように言った。

「おばあちゃんね。若いころ、遠い南の国にいたことがあるらしいの。その時この猿の手を誰かからもらったんだって。」

冴子のことばが続いた。

「それで、おばあちゃんが死ぬ時にね。本当に会いたい人が現れたら、その時にこれを使いなさいと言っつて、これをくれたの・・・。私この前、小野君に会ったでしょう？ 本当ですごく楽しかったの。それでもう一度 小野君に会いたいと思ったの。でも小野君が私のこと、どう思っつているかは分からないし・・・。その時に、この猿の手のことを思い出したの。」

冴子はしばらく真二郎の目をじつと見つめた。

「小野君。ひょっとしたら、猿の手をなくして困っつてるんじゃない？ もしそつならこの猿

の手、使っていていいよ。だって……。だって、私もう、この猿の手使う必要ないもの。ねえ、小野君。猿の手なんか、使わなくなつて、時々こうして、会ってくれるでしょう？」

冴子がはにかみながら、そう言った。

そうか！ そうだったのか！ 真二郎の心が何か、あたたかいもので一杯になった。

うん、もちろんだよ。もちろんだよ。真一郎は、心の中でそのことばを繰り返しながら、何度も首をつなずかせた。ことばにしたなら、涙がこぼれそうだった。

ぼー。フェリーが大きな汽笛を鳴らした。もうすぐ港に着くという合図の汽笛だった。

(了)